時報 特別号

1993年11月春山偵察合宿事故報告書

大阪大学山岳会

92年　冬山合宿
大明神尾根
取り付き付近

92年　冬山合宿
大明神山山頂
（左下が飯田君）

92年　冬山合宿
下山途中の林道にて
（右下が飯田君）

93年　新人歓迎合宿
白馬乗鞍岳
（右から二番目が飯田君）

93年　新人歓迎合宿
小蓮華岳頂上
（後列左二番目が飯田君）

93年　夏山合宿
真砂沢にて
（一番奥が飯田君）

時報特別号
1993年11月春山偵察合宿事故報告書

大阪大学体育会山岳部

序文

大阪大学山岳部 2 年部員飯田真宏君(当時理学部 2 年生)が、1993 年 11 月 3 日午前 8 時、北アルプス剣岳稜線から武蔵谷に滑落し、逝った。前途有望な若い部員を失い、残念でならない。

本報告書は事故の詳細を報告するとともに、関係の方々及び現役部員(当時)の追悼文をまとめたものである。

今回の事故は、一時減少していた部員が増え活動が活発になってきたところでの事故であった。阪大山岳部の伝統が十分に継承されていなかったのではないかと危惧している。再びこのような事故が起きないよう、原点に戻り大学山岳部の役割を考えていきたい。

部長　大野　義照

目次

Ⅰ．事故報告の部（3～12項）

1、春山偵察山行計画
2、事故発生から遺体の収容までの行動概要
3、事故検討会概要
4、山岳部における山歴

Ⅱ．追悼の部（13～38項）

Ⅰ．事故報告の部

1、春山偵察山行計画

・.計画決定までの経緯

10月20日（水）　6：00～
　部会で春山のための偵察山行のルートとして早月尾根～剣岳が決定し、そのメンバーとして
藤田 哲史（C・L）　3年
前田　智　（S・L）　3年
飯田 真宏　　2年
が決定した。

10月27日（水）　6：00～
監督森藤が来られて、計画書の検討を行う。
また、解散後に3年生と参加メンバーが残り、栃尾OBにアドバイスをして頂いた。

春山偵察合宿計画書

偵察山行早月尾根～剱～立山雄山～室堂
日時　　11/1～11/4　　メンバー:藤田、前田、飯田
1日　　馬場島～避難小屋(7.40)
2日　　～剱～剣肩の避難小屋
3日　　～真砂岳
4日　　～室堂

予備2日(剱までに予備日使用の場合、真砂岳行きは中止)
装備　　テント、ポール、EPI大x2、コッヘルx1、ザイル9φx2
　　ライトツエルトx1、医パx1、予備ポリタン、エンピ
　　バイルx3、捨て縄10m

参加者
　　藤田 哲史（理3）　　(06) 340－8330
　　533　大阪市東淀川区井高野3-3-23
　　前田　智　（文3）　　0745-32-7474

639-02　奈良県北葛城郡上牧町桜ケ丘 2-10-19
飯田 真宏（理 2）　　0424-23-5856
202　東京都保谷市ひばりが丘 2-5-34 エクセル保谷 50

在阪連絡先 森藤 正人
自宅:茨城市北春日丘４-１-３５-Ｂ２０１
tel.0726-21-2945
研究室:06-877-5111 ex.5013

２、事故発生から遺体の収容までの行動内容

〈行動日程〉

10 月 31 日　　離阪(23:20 きたぐに)
11 月 1 日　　入山 7:15 馬場島→13:30 早月小屋(雨後雪)
11 月 2 日　　7:00 早月小屋→14:15 剱本峰→15:00 平蔵避難小屋(快晴)
11 月 3 日　　6:00 平蔵小屋→8:00 事故発生（快晴）

〈事故までの状況〉

11 月 1 日 雨→曇り→雪
7：15 馬場島→13：30 早月小屋
雨の中を出発、雨具を着るが、逆に暑い。1200m ぐらいから、地面に雪がちらほら見え出す。2、3 日前から雪が降っていたそうだ。危険な場所もないので、飯田にトップをいってもらう。なかなか速く進め、避難小屋までの予定だったが、時間が早いので、早月小屋まで行く。雪のラッセルは、時々膝下ぐらいまであった。早月小屋があいているので、使わしてもらう。服が全部乾きよかった。
11 月 2 日 快晴
7：00 早月小屋→14：15 剣岳→15：00 平蔵の避難小屋
今日は天気良く、予定通り剣へ向かう。よって重荷で行く。獅子頭までも、春山ならいやらしそうな所が多くある。夏道がしかし思ったより出ている。危険な所は前田、安全なら飯田トップで進む。獅子頭は鎖が出ていて、夏道どうしに行く。カニのハサミも夏道で行け、問題なかった。結局、ザイルは一か所獅子頭前の細い稜線で一回出しただけだった。これもしかし、歩いてみると必要なかった。早月尾根核心ということもあり、一生懸命登っているうちに頂上に着いたという感じであった。頂上は寒いので、さっさと平蔵の小屋へ下った。この日も飯田は特に疲れていたり、風邪をひいたりというような体調が崩れた様子はなかった。
11 月 3 日 快晴
6：00 平蔵小屋→7：30 前剣→8：00 事故発生

今日も天気良く、出発。前剣まで、夏道も所々見え問題なく進む。前剣を下るときに事故発生。

〈事故の日の状況〉

4:00　起床

6:00　平蔵小屋出発

7:30　前剣着

8:00 少し前　飯田滑落

(藤田の行動)

8:00　飯田発見。

9:00　前田を呼びに登り始める。

10:00　コル着。前田より富山大の人の話を聞く。空荷で雷鳥沢ヒュッテに向かう。

12:00　ヒュッテ着。山岳警備隊と連絡。学生部へ電話。

12:30　森藤さんに事故連絡。

13:48　飯田をヘリが発見したとの無線を警察との電話中に聞く。

15:00 頃 飯田の死亡確認の無線を警察との電話中聞く。室堂の派出所に向かう。

(前田の行動)

8:00　コルで待機。

8:20　たまたま通りかかった富山大の高田さんにヘリ要請の依頼をする。

10:00　飯田のところへコルを下り始める。

10:30 頃 飯田のところへ到着。

15:00 頃 山岳警備隊の人と飯田搬出。

16:00 頃 山岳警備隊の人とヘリで室堂へ。

16:00　藤田、前田、飯田の遺体、車で室堂から上市警察署へ。

(飯田滑落の様子)

前剱から武蔵谷のコルへ下る途中、大岩があり、稜線伝いに下れないので、剱沢側の雪壁を下る。この時、飯田、前田、藤田の順であった。下り始めてすぐ飯田が前のめりにこけた。アイゼンを引っかけたのか、雪が思ったより深くて、バランスを崩したのが原因と思われる。雪は少しくさっていた。前にうつむけに倒れたまま滑落。初めスピードは遅かったが止まる様子は無く、やや急な斜面に入りそのまま武蔵谷へ滑落していった。

(藤田発見時の飯田の様子)

飯田は武蔵谷に入ってもなかなか発見出来なかった。雪上に血がこすった跡があった。500メートルくらい下った、幅 2、3m の所で飯田発見。飯田の 7、8m 上に雪渓上に岩が突き出ており、その横の雪上に血が 50 センチ四方くらいついており、そこに当たって止まったと考えられる。キスリングは肩からはずれていたが、キスリングに乗るようにして、やや

急な斜面に飯田は止まっていた。ヘルメットはまだかぶっていたが、2 つの大きな割れ目が走っていた。飯田は発見時呼吸しており、藤田が声をかけると言葉では無く体ではっきりとではないが反応したように見えた。飯田は急な所にいたので、藤田は、滑落途中飯田が落としたエンピで平らな所を飯田の上に作った。飯田はしかし自分では動けず、また藤田も持ち上げることができない事がわかり、飯田の下側にエンピで掘った。途中、飯田のメット、ハーネス、アイゼン。ピッケルの紐など、身を縛っているものは血行に悪いと思いはずした。飯田は初め頭の痛みを耐えるように頭に手をやったり、あおむきに寝ていると呼吸が苦しいのか寝返りを打ったりした。飯田は頭に切り傷があり、額右にL字形の大きな切り傷と、鼻と口の間に 2 か所の切り傷があった。また顔はむくんで目は開けられない状態であった。額の傷は確保用のテープで止血しようと頭の切り傷に直接まいたがすぐ取れ効果無かった。血もどくどくは流れでず、だらりとだれる程度だった。呼吸はゼーゼーとなったりスースーとなったりであった。前田が下りてくると思い待つが来ず、ヘリを呼ばなければいけないと思い飯田を 5m 程下の滝に落ちないようにセルフを取って、前田を呼びにいった。

(前田到着時の飯田の様子)

まったく反応無く、藤田によってバイルなどで確保されていた。呼吸も無く心臓も動いていない様子なので心臓マッサージを試みたが効果なし、セーター、ライトツエルト、シュラフをかぶせ EPI をたいた。

(飯田搬出の様子(山岳警備隊による))

剣沢にヘリで降り、武蔵谷を遡って現場到着(4 人)。到着後、飯田を収容袋に入れザイルを使って剣沢まで背負っておろす。剣沢からヘリで室堂へ。

3、事故検討会概要

1993 年 11 月 6 日　検討会 於 近鉄堂島ビル・大阪大学工業会会議室

出席者

徳永 篤史 会長	大野 義照 部長	森藤 正人 監督
尾崎 昭二	木村 征二	田島 汎
山本 光二	甲田 吉彦	明神 知
大川 和秋	戸叶 聡	東條 公資
紫藤 圭介	蔭山 健	栃尾 豪人
森 政士		

(以上ＯＢ敬称略)

川上和幸(C.L.3)(基3)、光永正樹(3)(理3)、前田智(3)(文3)、
藤田哲史(主務.3)(理3)、寺田浩昭(3)(基3)、中西英夫(2)(法3)
川口泰宏(2)(理3)、青木成一郎(2)(理3)、尾崎夏樹(2)(経2)、溝西慎(2)(理2)
赤井知司(1)(工3)、給田俊文(1)(理2)、中村 聡(1)(理1)

注. 左側の数字は山岳部学年

議事進行

1、部における偵察山行の概要
2、事故報告(別紙参照)
3、事故発生時の大野部長、森藤監督の対応(別紙参照)
4、飯田の山歴(別紙参照)
5、問題点
6、今後の対応

1、今回の偵察山行では全部で4パーティー送り出した。各パーティーのコースの概要及び参加者は以下の通りである。

- 新穂高温泉→中崎尾根→槍ケ岳→槍平→新穂高温泉
  川上(L.3) 赤井(1) 中村(1)
  (この山行には中西が参加することになっていたが怪我のため不参加)
- 中房温泉→大天井岳→蝶ケ岳→長塀山→上高地
  寺田(L.3) 川口(2) 青木(2) 尾崎(2) 山田(1) 磯部(1)
- 戸台→角兵衛沢→鋸岳→甲斐駒岳→黒戸尾根
  光永(L.3) 溝西(2) 給田(1)
- 馬場島→早月尾根→剱岳→別山尾根→室堂
  藤田(L.3) 前田(3) 飯田(2)

2、事故の報告
3、事故発生時の、大野部長、森藤監督の対応について
4、飯田の山歴について
5、検討会で取り上げられた問題点を以下に応答形式で箇条書きする。

Q、滑落地点ではアンザイレン(ザイルで互いを結びあうこと)の必要性はなかったのか。
A、滑落地点はアンザイレンするような傾斜ではなかったが滑落の危険はあった。しかし2年生がアンザイレンするような難しいところではない。

Q、飯田の装備に不備なところはなかったか。

A、ピッケル、アイゼンを着用しており不備なところはなかったと思う。

Q、滑落地点で3年がトップに立つべきではなかったか。

A、飯田が滑落したときの順番は前から飯田、前田、藤田であった。ザイルを出すときは前田が先頭に出たが、アンザイレンの必要を飯田も前田も認めなかったので飯田を先頭に出した。

Q、滑落してからピッケルストップをかけることはできなかったのか。

A、飯田は頭からつまずくように倒れて滑落し、しかも初速がかなりついていたためピッケルストップができなかったのだと思う。実際視野に入っている限りでは飯田のピッケルストップのアクションを認めなかった。

Q、もっと声を出しあって、注意を喚起するべきではなかったか。

A、前剱の頂上で藤田が「剱山荘が見えるけど最後まで気を抜くなよ」と声をかけた。しかし今になって思えば、その後も声を出せば良かったように思う。

Q、事故のとき全員がアイゼンを着用していたが、本当は着用しない方が良かったのではないのか。

A、滑落した地点付近では雪が積もっておりアイゼンの歯に岩が当たるようなことはなかった。結構時間が早いので時折雪面がクラスト(氷化)していた。以上のことからアイゼンを着用すべきだったと思う。

Q、ルートが間違っていたのではないか。

A、夏道は稜線沿いについていたが、その時は下降できない様に思えた。そのため雪の詰まったルンゼを下った。自分達の下降ルートが間違っているかどうかはわからない。

Q、飯田の疲労はどうだったか。

A、滑落したのが 8:00 ごろで、出発したのが 6:00 だった。しかも前剱の頂上で一休みしてから下降しはじめたので疲労はそれほどなかった様に思う。

Q、以前の山行で大事故につながるような事故はなかったのか。

A、それまでの山行で小さな事故は起こっていた。それが大きな事故につながる可能性はあったと思う。

Q、事故が発生してから飯田に対する処置でミスはなかったのか。

A、飯田を発見してから締めつけている物(たとえばピッケルバンド等)を外し、雪を掘って小さなテラスを作って寝かしてた。やがて心拍が弱まってきたので心臓マッサージをしたが効果はなかった。しばらくして体が冷えてきたのでシュラフとツエルトをかぶせて火をたいた。以上の措置にミスはなかったと思うが、ほかの処置のしてやり方があったと思う。

6、検討会で検討された今後の対応を以下に箇条書きにする。

・部として平日からトレーニングする。

・現実に即した滑落停止(ピッケルストップ)の訓練をする。
・これからも検討会を開催する。
・これからの山行にできるだけＯＢの参加を求める。
・山岳部の活動としては四年間で登山の定石を覚えるということに主眼をおく。
・定期的に文部省登山技術研修会に参加する。参加人数は２名としその費用は山岳会から支給される。
・追悼集を出す。
・保険の手続きをする。

大阪大学での動き

11 月 3 日(水)

11:30　富山県警より大阪大学へ事故の第一報あり。

11:50　大阪大学学生部より森藤宅へ電話。森藤はこの時留守で、家人が事故の有った旨聞く。

12:10　森藤帰宅。直後に松本に居る光永より、いまから鋸岳に入山するという電話がある。この時、森藤は光永に事故があったらしい旨を告げる。

12:15　森藤、学生部に電話して阪大山岳部の事故を知らされる。この時点では下山してないパーティは剣岳(藤田・前田・飯田)と槍ガ岳(川上・赤井・中村)の 2 つで、事故はどちらに起こったのか不明であった。

12:30　藤田より森藤宅へ電話。剣岳の前剣で飯田が滑落し武蔵谷に落ちたこと、滑落直後、藤田が現場に下降したときには飯田には意識が有ったこと、電話は雷鳥沢からしていること、現地に前田が居ることなどを知らせる。この時点での飯田の生死は不明。

12:35　光永より森藤へ電話。富山県警に問い合せたところ、剣岳で飯田が滑落したことが判明したので鋸岳の入山を中止し松本で待機するとのこと。

13:00　森藤、学生部に電話。飯田の実家の電話番号を知らせる。

13:30　富山県警の杉田氏より森藤に電話。山岳警備隊・ヘリコプターが出動したこと、前田がヘリコプターに飯田死亡のサインを送ったことなどを知らされる。

14:40　大野山岳部長・森藤、豊中キャンパスの学生部で糸魚川学生部長・森田教養部長とともに今後の対応を話し合う。このとき飯田の死亡が確認されたことを聞く。
また、16 時 45 分新大阪発の列車で保呂草学生課長と森藤が上市警察に向うことを決める

16:30　大野が学生部に電話して飯田の御両親が 6 時の飛行機で富山向うことを知らされ

る。

20:30　保呂草・森藤、上市警察署に到着。警察の人より事故当時の様子、飯田の様子を詳しく聞く。

飯田の御両親は少しまえに到着していた。

20:40　光永・溝西・尾崎・給田が松本より上市に到着。

20:50　飯田と御両親は車で東京に向う。

槍ケ岳パーティはこの日下山し夜行列車で大阪に向う。

11月4日(木)

2:00　保呂草・前田・溝西・尾崎・給田・森藤は夜行列車で大阪に向う。

藤田と光永は、残してきた荷物を回収するために、翌日現地(武蔵のコル)に向う事とし、富山に残る。

7:00　保呂草・前田・溝西・尾崎・給田・森藤、大阪着。

藤田・前田・光永・溝西・尾崎・給田は豊中キャンパスへ向う。

8:30　前田が学生部で事故当時の様子を報告。

9:00　大野・森藤、吹田キャンパスの学生部で保呂草・平ノ上課長補佐と今後の対応(詳しい報告書の提出、保険の加入状況、通夜葬儀への対応など)を話し合う。

9:40　大野が、金森阪大総長・坂本学生部次長に事故の報告を行う。

(記 森藤)

4、山岳部における主な山歴

1992年8月　涸沢定着合宿

夏山縦走　後立山縦走

10月　個人山行　南アルプス東部縦走

11月　偵察山行　毛勝山大明神尾根

アイゼン合宿　御嶽山

12～1月　冬山合宿　毛勝山大明神尾根

1993年3月　春山合宿　中央アルプス縦走

5月 新人歓迎合宿　白馬大池

7月 プレ夏山　南アルプス深南部縦走

8月 真砂定着

夏山縦走　南アルプス縦走

10月 個人山行　白山

11月 偵察山行　剣岳早月尾根

馬場島～早月尾根～剣岳～別山尾根～前剣下降中に遭難

Ⅱ．追悼の部

飯田　真理子

1972年12月10日。品川区の都南病院で呱々の声をあげました。たしか総選挙の日であったように記憶しています。3720g。赤ん坊のわりに整った顔をして紅葉のような手をひらいていました。

幼い時に母を亡くし、自分の母親像をもたない私に、ちゃんと子育てが出来るのだろうか、自分のようないびつな人間にはなって欲しくない・・・・・そういう不安を心に感じつつの母親への出発でした。

天の采配の妙というべきでしょうか、未熟な両親の子供としては、真宏はほんとうに手のかからない、ききわけの良い、心のやさしい子供でした。幼い頃は、真宏のききわけの良さにどれだけ助けられ、愛らしさにどれだけ慰められたことか、長じてからは、黙って家族のグチを聞き、的確な言葉で母親をいたわり支えてくれていました。

乳児の頃はとにかくよく眠る子で、夜泣きもほとんどせず、育児書頼りの母は三時間毎に、きちんと消毒した哺乳ビンでミルクを飲ませようとするのに、全然飲んでくれず朝までぐっすり眠っていました。栄養不足になるのではないかと、食の細いことが心配でなりませんでした。

体の細い分、身動きは早く、半年ではい始め九か月で歩き、言葉も十か月位からカタコトを話し始めました。女の子とよく間違われる程やさしい顔をしていました。

自動車や列車が大好きで、知人から拝借した乗物図鑑をボロボロになるまで眺め、車の名前、列車の名称など片っ端から覚えていました。絵本も大好きで、一才頃から、雪で外へ出られない時は一日絵本を読む相手をさせられました。

一年七か月で弟が生まれましたが、本人は兄としての自覚をいつのまにか持っていたようで、母親を弟に譲り渡して、おしめを運んでくれたり、あやしたり、なかなかのいいお兄ちゃんぶりでした。唯一つ弟と一緒に哺乳ビンで牛乳を飲むのを三才までやめられませんでした。いい子であることのつらさの反映だったのでしょうか。

二才の頃、絵本で読んだのでしょうか、「種をまいたら、芽が出て、どんどん大きくなって、お花が咲いて○○の実がなりました。」という文が大変気に入って、リンゴ、カキ、ミカンなどと私と言い合って遊んでいるうち「ママ、キャラメルの種をまきました。芽が出てキャラメルの木がどんどん大きくなって、お花が咲いてキャラメルの実がなりました。」とじつに嬉しそうにいいました。

「すごーいキャラメルの木!あれっまあちゃんキャラメルって木になるんだっけ、種があったけ?」

ママ、キャラメルにも種があるといいのにな。そうしたらいっぱいキャラメルが食べられるもんね。」そう言っていたずらっぽく笑ったその笑顔の愛らしかったこと、今でも私の

脳裏に焼きついています。小さい時からユーモラスなところのある子でした。二才半の頃のことです。寝かしつけようようとしていると、棚の上のダンボールにかかれているりんごの絵を見て、「ママ、リンゴが三つあるよ、一つ僕が食べると二つになるよ。もう一コのんちゃんにあげると一つになるよ、もう一コママが食べるとなくっちゃう。なくなっちゃうのがゼロだよね。」といいました。テレビか何かで見たことが心に残っていてリンゴの絵と結びついたのでしょうが、二才の子がこんな形で数の学習をするとは思いもよらなっかたので。、本当にびっくりしてしまいました。知恵付きの早さ、記憶力の良さには驚かされるばかりでしたが、それだけに、知識ばかりでなく、情操面でも豊かな人間に育ってほしいといつも願っていました。

生後六か月から二才、三才から七才まで、秋田県大館市の釈迦内で育ちました。

社宅のすぐ近くにリンゴ園ナシ園があり、池や畑、水田、小川、神社、線路等、更に小山や雑木林がありました。小さな神社の境内で相撲をとったり、飛び降りごっこをしたり、小川に笹舟を流したり、あひるや豚や牛を見にいったり、夏には蛍取りや花火、冬にはソリ遊びにミニスキーと子供を育てるのには大変恵まれた自然環境がありました。異年齢の集団もあり、徒党を組んで小釈迦内の子達と喧嘩する縄張り争い等もやっていたようです。くさいのが苦手な真宏は、豚舎を見に行くのを大変嫌がっていましたが、他の子供達の見たいという声に押されて渋々一番最後についてきて、真っ先に逃げ出していたものでした。近くの牛小屋にお腹の大きな牛がいて、何日かしてのぞきに行ったら、生まれたばかりの子牛がいて皆で手を叩きあって喜びあったこともありました。

この社宅で一番素晴らしかったのは、家の窓から奥羽本線の列車が見えることでした。歓声をあげ、手を振りながら列車を追いかけたり、夜汽車を見送ったりの日々が、未知の土地への夢と憧れを育み、真宏の鉄道好き、旅好きの因をつくったのではないかと思います。中学、高校、大学時代を通じて、北海道を除いて、日本のほとんどの路線を乗りまわっていたのではないかと思われます。青春十八切符や周遊券で、気ままな一人旅を楽しみ、その土地の人達の会話を小耳にはさんで楽しんだり、景色の美しさにみとれたり親切なおじさん、おばさんに声をかけられ、おにぎりやジュースをごちそうになったり、いい旅をしていたようでした。

小二から小六まで札幌の定山渓の奥にある豊羽鉱山で過ごしました。

山女魚のいる川、仙人が住んでいそうな天狗他家、錦織なす紅葉を居ながらにして見られる初秋、雪に何もかも埋もれてしまう冬、春にはカタクリエゾエンゴサク、スズラン、ミズバショウ、達種々の花が咲き、山菜の宝庫となる山。キタキツネやエゾリス、時には熊までが出没するところ、見渡すかぎり山ばかりのそこが行き止まりの鉱山の社宅。学校は小中併置の僻地校で小六の時には、五六年の複式学級でした。

その学校で真宏と私は大きな試練に出会いました。それは真宏が小四の時でした。

「真宏がいじめにあっている」というクラスのお母さんから告げられたのです。

転んだと泥んこになって帰ってきたり、背中の考えられないような所に打ち身があったり、

弟に対して急に怒りっぽかったり、成績が下がったり、この子いったいどうしたんだろうかと不審に思っていた矢先のことでした。何度も学校へ足を運びました。眠れないといってふるえている真宏の背中をさすりながら添い寝し、眠れない夜を何日も過ごしました。自分の子育てが間違っていたという思いに責められ、人間の尊厳を否定するようなことを、「あそびでやっているから」言いのがれる教師の鈍感さに怒り、子ども達の心の歪みに暗たんとするつらい日々を過ごしました。この時も昌宏が私を救いました。悩み疲れて暗い表情の私に、

「お母さん、もう心配しなくていいよ。僕一人で頑張れるから大丈夫だよ。」

十数人のクラスの中で、わずか六人しかいない男子。その中で真宏は一人孤立して数か月間を過ごしました。

真宏がおとなしくて聞き分けの良い子であることに、いつも寄りかかって子育てをしてきた私の親としての不明を何度も心の中で詫びながら、真宏の孤独なたたかいを黙って見守っていることしか出来ませんでした。この出来事が真宏の心に傷跡を残しているのではないかと私はいつも不安な心持ちで暮らしていました。そんなころ、友人が自由の森学園という学校が出来るということを知らせてくれました。子供が主人公の学校、点数で選別しない学校、林竹二さんや遠山啓さんの著書にひかれていた私は真宏に自由の森の話をしました。鉱山の学校の小さな世界にもそれなりの良さもありますが、もっと広い世界でのびのび過ごさせたいという思いが私の中にありました。

あまり自分の意志をはっきり出さない真宏が、めずらしく「受けに行ってみたい」と言いました。そして一人受験のため上京して行きました。

「お母さん、僕テレビに出たんだよ。ニュースの時に自由の森のテスト風景が映って、僕がリコーダ吹いている所が映ったんだよ。」

受験から戻るなり、嬉しそうに真宏は報告してくれました。「お母さん、受かったら僕あの学校に行きたい。授業がすごくおもしろかったよ。あんな授業はじめてだった。受かるといいなあ。」生き生きと授業の話を聞かせてくれました。自由の森は真宏にとって、精神的に大きな転換の場であったように思えます。今までの良い子の枠から解き放たれて、人の評価によらず、自分の意志で生きるその事の楽しさと、自分を律することの難しさと、いろんな意味で揺れまどいながら、自分なり行き方を見つけていった時期であったように思います。親元を離れ、祖父母の下で過ごした八か月、中一の一月からは田無の社宅で海外赴任した父親の代役も受け持っていました。反抗期の入り口にいた弟に手を焼く母親を支え、甘えん坊な妹には、誰よりもやさしい兄としてよく面倒を見てくれました。

自由の森で伊東信夫先生(愛称ブーさん)とクラスの仲間たちに出会えたことは、真宏にとって大きな宝であったと思います。自由の森では本当にいろんなできごとがありました。子ども達のパワーが、野放途に溢れ出しているようでした。先生達も親も試行錯誤の日々であったように思います。そんな中でブーさんはすごい先生でした。決して子供達にお説教をしない、いつも子供達のに立って、子供に寄り添って共に生きている先生なのです。真

宏にとっては、ありのままの自分を受け入れ、理解してくれる先生であり、私にとっては、いつも親としての在り方を問われているような気持ちにさせられる怖い先生でした。真宏がいじめにあったことがいつも心にかかっていた私は、ある時その不安をブーさんにぶつけました。

「お母さん、もう真宏はとっくにそんなところは越えています。心配いりません。そうですか、そうんなことがあったんですか。それでわかりました。真宏の書く文章には、いつもきらりと光る美しい言葉があって、どうしてこの子はこんな美しい言葉が使えるのだろうかと不思議に思っていたのですが…。」

中三の一学期のことでした。食堂でブーさんに「昨夜真宏とけんかしました。」と報告すると「えっけんかしたんですか。お母さんのその論法でやられたら真宏が……。」顔色を変えて先生は真宏のことを心配してくれました。「いえ、真宏にしっかり言われてしまいました。『お母さんは授業に集中しろしろと口で簡単に言うけど、集中するってどういうことかわかっていってるの？集中して一つの事を考え出したら、次の時間がなんであろうと休み時間も弁当の時もずっとその事を考えているんだよ。そんなに簡単に--時間毎に、あれこれ集中するなんてことできるわけがない。学ぶとか簡単に言うけど、学ぶってことはしんどいことでもあるんだよ。知るってことは、どうするかって自分自身が問われることでもあるんだから。』そう反論されて、返す言葉が見つかりませんでした。フラフラ遊んでばかりいるようでも、子供って大事なことをちゃんと受けとめて成長しているんですね。」「そうですか。真宏がそんなことを言いましたか。よかった。」先生の丸顔が一段と丸い笑顔になって子供達への愛情があふれ出ていました。ブーさんは時々親子共々に公開授業を開いてくれました。一度私もその授業に参加したことがありますが、その素晴らしかったこと。松尾芭蕉の奥の細道の一節、芭蕉と曽良が白河の関を越えていくくだりですが、ブーさんの朗読を聴いているうちにその情景が頭に浮かび、私も芭蕉や曽良と共に、衣装を正し、髪に花を飾って関を越えているような気持ちになってしまったのです。すごい感動がありました。こんな授業の経験は初めてでした。

「真宏、ブーさんの今日の授業素敵だったね。あんた達にあのおもしろさがわからないんだったら、お母さんが代わりに自由の森に授業受けに行きたいな。すごく感動したよ。」「お母さんと僕達じゃあ人生経験違うからね。」と軽く一蹴されてしまいましたが、ブーさんの授業はなかなかいいよと気に入っていたようでした。

新校舎の中三の教室の後壁に大きなマジックの落書きがありました。真新しい校舎にこんなことするなんて、親達は驚いて先生の顔を見るなり、「この落書きは消せるのでしょうか。」「ちゃんと注意してくれたのでしょうか。」「なんでこんなことをするのかしら。」口々に非難めいた声をあげました。

「いやあ僕もこれを見た時は悩みました。中三にもなってこんなことをする子供の心がわからなくて、心理学の大学の先生の所へ相談に行きました。その先生の話では、幼児期の母子の依存関係に問題があるのではないかと言ってました。中学生ならまだ充分取り戻

せると…。お母さん、壁の落書きは塗り直せば消えます。子供の心はそうはいきませんよ。」親は皆シュンとなって自分達の言葉を恥じ、自分の子育てを見つめ直したひとときでした。子供達に寄り添い、子供達の内からの成長を見守る先生の存在は、要求されることばかり多い過干渉の両親に育てられた真宏にとって、心のオアシスのような存在ではなかったかと思います。

ありのままの自分でいいのだということを、真宏は自由の森のたくさんの出会いの中で学んだのだと思います。ブーさんの存在は、いつも真宏の心の中にあったようで、阪大理学部へはいったことを知らせるブーさんあての葉書が机の引き出しの中から見つかりました。私自身ブーさんやその周囲のお母さん方にたくさんの大切なことを教えられました。自分のような人間には育てたくないという思いこみが、逆に良き母でなくてはという思いにつながり、常にマイナス思考となってしまっていた私の姿勢。子供が育つということを育てるという観点からしか見てこれなかった思い上がり、私の未熟さが問い返されるような先生と親たちのつながりが、私の心の目を少しずつ開かせてくれたのだと思います。真宏はここで人間として大きく成長し、人を受け入れる心の広さや、人に要求がましいことを少しも言わず、常に一歩身を引いたところにいて、必要とされるときには黙って行動するという自分自身の生き方を見つけていったのだろうと思います。

中３の二学期から父親の赴任先であるオーストラリアへ転居しました。非常にシャイで控え目な真宏にとっては、オーストラリアでの生活は余り楽しいものではなかったようです。ただここでバスケットを楽しめたことが、大きな収穫だったかもしれません。これ以降バスケットに夢中になり、NBA のテレビ中継等もビデオに収めて、何度も飽きずに眺めていました。

高２で帰国し、成蹊高校に転入しました。学校の様子等あまり話さないのですが、オーストラリアのハイスクールよりはるかに楽しそうに通っていました。又私学に通う自分の立場や家計の大変さを考えたのか、近くの薬局でアルバイトを始め、少ない給料の中から、毎月弟妹にお小遣いをやり、時には私にも「何か買いなよ。」と大盤振る舞いをしてくれました。お祝など貰うことがあっても、決して独り占めしたりすることはなく、弟や妹に分けてやる子でした。

勉強については、こつこつと努力を積み重ねていくということが苦手で、好きなこと以外はやりたくないという姿勢でしたから、大学入試はクリアできず、一浪となりました。予備校は、本人は違うところを希望していましたが、代ゼミから無料優待が届いたため、父親の「家計を考えろ。」の一言で代ゼミに決めざるをえませんでした。代ゼミでは友人もできず孤独な日々だったようですが、授業がおもしろいからいいと割り切っていたようです。十一月二十三日から一か月余り、私が腰椎を傷めて動けなくなり、家事のすべては真宏の肩にかかることになってしまいました。のんきものでいくら勉強熱心ではない真宏であっても、この時期の母親のダウンは大変迷惑であり、心の中では焦りも感じていたことでしょうが、一言の愚痴も言わずに、家族のためにもくもくと家事をやってくれました。

私たち家族はいつも真宏の優しさに寄りかかって暮らしてきていたように思います。父親は、真宏が何をしていようとおかまいなしに呼びつけて、自分の雑用や走り使いを言いつけ、母と弟妹は何かおもしろくないことがあると、真宏のへやに入っていきました。

父親と衝突して、腹立ちのおさまらない次男が、真宏の部屋で父の理不尽さを訴えたとき、黙って弟の言い分を聞いていた真宏が、「お前はな、自分は人に甘えているのに、人を甘やかしてやることができないのか。」と言いました。私はこのとき真宏が我が家の中で一番の大人だということに気付かされました。親よりもはるかに人間として大きく育って、親や弟妹の甘えもちゃんと受け入れてやってきたのだということに・・・。

まだ妹が小学生のころですが、家族でどこかへ出かけようとすると、決まって「私行かない。」と言い出すのです。私と次男は説得するのが面倒になって、「じゃあ、あなたはお留守番ね。」と置いて出るのですが、真宏はこの妹を特別かわいがっていて、どうしても置いて行く事が出来ずに、20分でも30分でも、「何故嫌なのか、どうすれば行くのか。」と説得にかかるのです。そして必ず妹を連れて出てくるのです。その気の長さ、やさしさには飽きれてしまう位でしたが、でも真宏のそういう性格に、私はどれだけ助けられていたことかと感謝するばかりです。本命の京大理学部には入れませんでしたが、阪大に受かって、うるさい家族のもとから離れられ、自由に暮らせることは、真宏にとって大変嬉しいことだったと思います。

真宏の高校時代の友人が、「山岳部のどこがそんなにいいの?」と聞いたからで、「一番は山の仲間かな、その次が自然の美しさ・・・。」と答えたそうですが、心を通わせられる仲間を山岳部で得られたことも真宏の大きな喜びだったろうと思います。

真宏が山岳部に入ると行ったとき、父親も私も危険だからと一応反対はしました。でも大学生になっている子を、もう親の思い通りに動かすことはできないと分かっていましたので、会う度に「気をつけて行くように。」と心配している思いを伝えておりました。坂道が苦手の私には、登山の楽しみや喜びなんてまるで理解できず、「危ないからやめたら。」とか「せめて女の子のたくさんいるワンゲルにしたら、女の子と縁のないところばかりいてつまらないじゃない。」などと冗談混じりの文句を言っておりました。

93年の8月末、真宏が予定より早く下山してきました。(この前年の夏山合宿のときは、すすけてつぶれかけた汚いおおお鍋をリュックにぶら下げて帰宅し、こんな格好で都心を抜けてきたのかと、皆であきれるやらおかしいやらで大笑いをしたものでした。)次男もラグビーの合宿から戻り、海へ行きたいとの希望でしたが宿が取れず、最終的に清里の清泉寺へ行く事になりました。

真宏の希望で、飯盛山へ登ることになり、野辺山から歩き始めました。娘がきっと真っ先に音をあげるだろうと思っていたにもかかわらず、真っ先に文句を言ったのは、坂道に耐性のないこの私でした。「すぐそこに山が見えているのに何でこんなに歩かなきゃあいけないの。まるで詐欺じゃないの。いつになったらつくのよ。」「お母さん、何馬鹿なことを言ってるんだよ。登山って言うのは、山がすぐそこに見えていても、いくつも峠を登

ったり降りたり、山を越えたり、一歩一歩踏み締めながら、目的の山を目指していくものなんだよ。そんなすぐに山にたどりついたら登山の意味がないだろう。」真宏にあきれられながら、文句を言いつつ平沢峠へさしかかったとき、あまりの八ケ岳の美しさに、裾野に広がる町並みの愛らしさに見とれてしまいました。

「真宏、お母さんあんたが山に登りたがる気持ち少しだけ分かった気がする。すごくきれいだね。命が洗われるようだねえ、素敵だね。」「そうだよ。山って本当に気持ちがいいんだよ。すごくきれいなんだ。夜なんか空の星がこわい位に、今にも降ってきそうに輝いていて、伸ばせば手が届きそうに思えたりするんだよ。黙々とひたすら歩いていると、思い掛けないところに花が咲いてたりするのも、すごく感動するよ。」無口な真宏が、この時はとても楽しそうに山の話をしてくれました。目の前に頂上が迫ったとき、急坂に恐れをなして、「お母さんはここで待ってるから、三人で登っておいで。こんな坂とても登れない。」と尻込みする私に、「お母さん、急坂に見えても登っていけばすぐだから、下から見上げるほど大変じゃないよ。頑張って登ってみなよ。」と励ましてくれて、なんとか飯森山の頂上へと到着しました。「金峰山が見えるはずなんだけど、雲がかかっていて残念だな。きれいな山なんだよ。」いくつかの山の説明を聞いて、四人で、雲がかかって神秘的な雰囲気の八ケ岳や牧場の牛を眺めながら、お弁当を食べました。来年の夏には、兄弟三人で八ケ岳に登ろう。お父さんとお母さんは、ふもとの温泉で待ってればいいよなどと語り合いながら・・・。

牧場の牛の群れを抜けて、清里の清泉寮までひたすら歩きました。足の遅い私が、皆の足手まといになっていましたが、誰も何も言わず、ひたすら忍耐強く母のペースにつき合ってくれました。清里の町の変化ぶりには目もあてられない気がしましたが、それでも清泉寮の当たりは静かで高原の雰囲気が十分残っていました。

飯森山からの下山のとき、真宏が足を滑らせて転びました。「こらっ!山岳部がこんなところで転ぶとは何事だ。他の誰も転んでないのに、訓練が足りないんじゃないの・・・。こんな山だからいいけど、本格的な登山のときは、命取りになりかねないんだから、本当に気をつけなきゃだめだよ。まったくそそっかしいんだから、心配でしょうがないね。」と冗談半分で注意したのですが、それが現実のものとしておそいかかってくるとは、その時は思ってもみませんでした。この旅行が真宏といった最後の家族旅行となりました。

あまりにも早く逝ってしまった息子に「そんなに山が好きなら、もっともっとたくさんの山に、心ゆくまで登ってから逝っても良かったじゃないの。とつい恨み言の出てしまう弱虫の母親ですが、私たち家族を精一杯支えてきた真宏の優しさに、そして真宏と二十年一緒に生きてこられたそのことに、今は感謝しつつ生きてゆかねばと自分に言い聞かせる毎日です。それにしても息子を失った私の心の空洞は埋め難く、悲しみはどこまでも切なく深い・・・。

真宏は、たくさんの人達に支えられ、自分の青春を精一杯真宏なりの誠実さで生き抜いたのだと思います。

真宏の青春の思い出として、今一つ私の心に残っていることがあります。真宏がなくなって一か月ほどたったころ、一人の女性が我が家を訪ねてくれました。彼女のことは、高三のころ真宏がほのかな思いを寄せ、浪人時代を通じて、心の支えとして大切に思っていたことを、真宏の言動から察っしておりました。大学に入ってからも、そして剣岳に行く前にも彼女に電話していたことを彼女の話から知りました。高校卒行事のスキー旅行では、スキーが得意でない彼女をいつも真宏がフォローしていたことを、彼女は涙と共に語ってくれました。それは真宏にとって、どんなにか幸福で誇らしい思い出となったことでしょう。

「優しいだけが取り柄の子だったから。」と言う私に、彼女は、「いいえ、飯田君は強い人だったと思います。誰でも受け入れることが出来るということは、自分をしっかり持っていなくては出来ないことだと思いますから・・・。」そう言ってくれました。私はこの彼女の言葉に感動しました。真宏がこの女性を好きで会ったことを、女性の真価をきちんと見ることの出来る人に育ってくれていたことを誇らしく思うと同時に、彼女が母親の私よりも深いところで、真宏を理解してくれていたことに深い感動を覚えました。こんないい人間関係を作っていたのかと、若い人達のつながりにあらためて目を開かれる思いでもありました。

彼女が「このことは忘れない。」といってくれた言葉にも慰められました。私がいなくなった後にも、真宏のことを覚えてくれる人達がいるのだと思うと、大きな救いを感じました。彼女は私の知るかぎりでは、真宏の初恋の人であったと思います。その彼女の幸福を真宏はきっと見守っていると信じます。

"真宏、あなたは幸せだったのね。あなたを頼りにしていた家族と、たくさんのいい友達に恵まれ、おばさんファンもたくさんいて、そして初恋の思い出までしっかりもって、大好きな山で逝ったんだものね。

あなたの魂は、まだ剣の山にあって、私たち皆のことを見守ってくれていると信じています。二十年と十一か月、私たちを支えてくれてありがとう。

合掌"

「真宏君、ありがとう」

高田　伸子

主人の転勤で秋田県大館市の社宅へ引っ越ししたのは、息子が二才になろうとしている頃でした。そこで三才の真宏君、一才の望君兄弟とお会いすることになったのです。

初めてお宅へ伺ったのは、お正月も過ぎ、灰色の空から根雪になりそうな粉雪が舞い出した日のことでした。

息子が今でも宝物としている「汽車のえほん」にその時出会ったのです。イギリスの作家オードリーの絵本は、今でこそ日本のテレビで漫画にもなって広く知られておりますが、当時は翻訳されて発売されたばかりでした。十四、五巻もあるうちから、早速何冊か取り

寄せ、毎日時間のある限り読まされました。その物語をどんどん覚えてしまった三人は、ベランダにあった幼児用のブランコを列車に見たて、ギコギコこぎながら、畑の向こうに見える奥羽線の特急や寝台列車まで乗り入れさせて、日本中、いえ世界中かけめぐらせているのでした。

四月も末に近づくと、雪融けを待ちきれないように、一斉に花が咲きはじめ、春がやってきます。前庭に積まれていた背丈程もある雪の山が、暖かな春風で一気に融け出し、庭いっぱいの大きな池になりました。三人は興味津々で、はじめは板切れや発泡スチロールの箱などを端の方に浮かべて遊んでいましたが、しばらくして行ってみると、冷たい水に腰までつかるようにして遊んでいるので、あわてて着替に連れて帰ったこともありました。

前庭の向こうにある畑の野菜が育ってくると、格好の虫のすみかとなります。虫カゴと虫網を振り廻して遊ぶ三人の姿が、夕食時間になるまで続きました。

三人共、幼稚園や保育園に行っていた夏のある日、突然園から電話がかかってきました。三人が痒がっているので迎えにくるようにとのことです。飯田さんと急いで行ってみると、首から胸一面に掻いたあとがあり、それが腫れあがっています。いつもすり傷や虫さされなどが断えなかった三人でしたが、その時ばかりは神妙な顔をしていました。早速、皮膚科で治療してもらい、夕方までにはすっかりおさまりましたが、幼稚園の送迎バスが来るまでの、ほんの僅かな間に、雑草の繁る畑の入口あたりにもぐりこんで、毒蛾の幼虫にさされたようでした。

カブト虫やクワガタなどは毎朝玄関の外燈の下で何匹も捕まえることが出来たので、餌用のスイカやメロンの皮などが冷蔵庫を占領しておりました。

真夏でも泳ぎたい程の暑さは、ほんの一週間位しかありません。海に行く機会もほとんどない三人のために、車で四十分程の所にある「あいのり温泉プール」へ行ったことがありました。水着を着て水をかけあったり、もぐったり、浮輪に入ってバタバタしたりと、やっと水遊びの経験をすることが出来ました。

近くの田圃への「ホタル狩り」に息子も連れていっていただき、おみやげのホタルを何十年ぶりに見ることが出来て、私が大感激したこともありました。

社宅には同じ年頃の子供が十人位おり、近くの社まで小遠足をしたことがありました。男の子は、いなごやバッタとり、女の子は花を摘みながら、道端で草を食べている山羊や水路のあひるを観察しながらの道中でした。赤い鳥居をくぐり、大きな石段を、七、八段登ると、枯れ葉の厚く積った境内です。どんぐりをポケットにびっしりつめ込み、十人でいっぱいになる祠のぬれ縁に腰をかけ、知っている限りの歌をありったけの大声で歌って帰ってきました。

翌年には、二十分位のところにある獅子ケ森という小山に行って見ることになりました。幼稚園に行っている男の子達の一団はアカシアの林のゆるやかな道から、唐松や杉の林の中の広めの道を少し急になる尾根近くまで、どんどん登って行きました。二才になる子も二、三人居て母親とのんびりついていきました。岩づたいの細い急なところに出ると、道

がないと文句が出てきました。手のかけ方や足の置き方を教えてあげると又さっさと登り始め、全員やっと頂上の一枚岩の上に出ました。眺望が思ったよりきかず、となりの部落の屋根が、はるか下の黄色くなった稲穂の中にいくつか見えるだけでした。皆でアメを少し食べて、「ふじ山」を合唱しておりてきました。帰りはあんまりさっさと簡単に降りてしまったので拍子抜けがしました。

雪が降りはじめるとソリ遊び、雪合戦、雪だるま作り等、外遊びには事欠きません。ヤッケや手袋がぬれて冷たくなると、家に入ってモノブロック遊びです。ダンボール箱にいっぱいのブロックを、先ず部屋中にまき散らすのです。これは「よーし、これから思いきりやるぞ」という宣言なのです。それに積木やミニカーなど、他のおもちゃが加わり、最後には壊すのが惜しいような模型や立体が出来ることがありました。それを又、思い切りよく壊してしまい、さっさと後片づけをしてしまうのが、三人共案外得意でした。

毎日毎日飽きずによく遊びました。年長だった真宏君が時には叱られ後を一手に引き受けてくれ、小さい子のめんどうをよくみてくれたのと、お母様がどの子にも深い愛情をもって接して下さったことが、楽しい思い出ばかりとなって残っているのだと心から感謝しております。

昭和五十四年の一月に私共は東京へ越し、飯田さん達はしばらくして札幌へ転勤となりました。上京の折にはよく遊びに来て下さり、泊まってもいただきました。そんな夜、三人は紙と鉛筆を持ち出し、部屋の隅に陣どって、「新しい鉄道路線の開拓」と、「新線につける駅名作り」に夢中になり、いつまでもいつまでもクスクス笑いが続いていたのを、つい昨日の事のように思い出します。

真宏君、一緒に沢山遊んでくれて、本当にありがとう。

「飯田君は白鳥になって還る」

伊東　信夫（自由の森中学校当時の担任）

小説「氷壁」で有名な、「いつかある日」（フランス民謡）の一節に

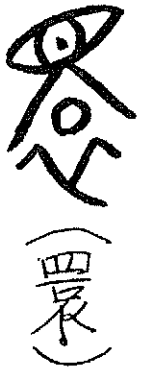
友よ　山に
小さなケルンを
積んで墓にしてくれ
ピッケルを立てて

というのがある。

これが、飯田真宏君のことになろうとは・・・。

ぼくは、くやしくてならない。

漢字の世界では、死者の襟もとに玉をおき、その目がひらき、命の蘇生することをねがう。



その字が「睘」であり、「環(めぐる)」になり「還(かえる)」になる。

飯田君の魂も、めぐりかえってほしい。ぼくはそうねがって、彼の胸に「睘」の一字を抱かせ、旅立ってもらった。

三千数百年前、漢字をつくりだした人々の観念では、死者となった祖先たちは鳥になるのである。そしてその祖霊たちは、季節を定めて、ふるさとに還ると信じられていた。

十一月といえば、白鳥の飛来する季節である。そうだ、飯田君は、白鳥となり、あのおおらかな飛翔で還ってくるにちがいない。ぼくには、そう思えてならない。

須田　靖子 (成蹊中学高等学校教諭)

拝啓、立秋とは名ばかりの暑さ厳しい毎日が続いておりますが皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

突然の手紙で皆様驚かれていることとは存じます、私は成蹊中学高等学校の教諭で、飯田君とは彼の高三の数学の授業を担当して何度か話をしておりました。彼が高三のとき、私はまだ教師二年目でした。授業中もなかなか皆をまとめるのが大変だった時です。それなのに一番最後の授業が終わったら、理系クラスの皆はクラッカーをバンバン鳴らし、記念品と一枚の色紙によせ書きをしてくれました。真宏君のよせ書きは「リラックスして受けられたいい授業だったと思います。(ときどきリラックスしすぎてねてしまったけど)」と小さな字で丁寧な字で書いてくれました。その後も理系クラスのスキーや飯田君が阪大に合格した時の飲み会などには必ず声をかけてもらい、一緒に楽しいひとときを過ごさせていただきました。飯田君はいつも少し端の方にいて、はにかんだような笑顔ですわっていました。阪大で山岳部に入ったと聞き、夏休みもなかなか東京に戻る暇がなかった用ですが、大学一年の夏、電話をかけてくれました。「これから夜行で大阪へ行くんですけど・・・」といっている電話の向こうでも、やっぱり少し無口ではにかんでいる飯田君の姿が想像出来て懐かしく思ったのをおぼえています。「どうしてもっと早く電話をくれないの、今度帰って来たら必ず連絡してね」と言いそのままになっていたのですが、その後も忘れずに連絡をしてくれました。一度は突然学校出あい、数学研究室で、二時間程でしょうか、大学生活、妹さんのことなど話してくれました。

山岳部の話は本当に楽しそうに、それから妹さんのこともとても可愛がっているんだなあと思えるように話してくれました。飯田君らしく言葉を飾るわけではなかったのですが、、素直に朴訥と語ってくれました。そしてもう一度は、せっかくだからお昼でも一緒に食べようと言うことで学校近くのレストランに入りました。人なつこい笑顔は高校を卒業してからも変わらず、私としてはときどきもっとずうずうしくなればいいのにと思ったり、もっとえらそうに振る舞ったらいいのにとはがゆかったり・・・。

昨年までのことが、走馬灯のように頭をよぎってゆきます。御家族の皆様は本当に大変だ

ったことでしょう。実は私にも姉がいたのですがやはり事故で五年前に亡くなりましたので、少しはわかるような気がしております。忙しさにまぎれて遅くなってしまいましたが別便で専攻を送りました。御仏前にお供え下さるようお願い申し上げます。

まだまだ残暑厳しい折柄、皆様おからだ御慈愛下さい。
末筆ながら皆様のご健康をお祈り申し上げます。

井上 裕貴子 (元成蹊高校 3A クラスメイト)

飯田君は高 2、高 3 の二年間一緒に高校生活を過ごした、大切な仲間です。単なる一人のクラスメイトというだけでなく、彼の言動、行動一つ一つに非常に大きな影響を受けたものです。

飯田君は、「不言実行」「男は黙って勝負する」という言葉通りの男の子でした。普段は無口で目立たないのですが、時折する話は本当に身に沁みる話ばかりで、私にとって飯田君は大きな大きな存在でした。言動だけでなく、きちんと行動も伴っていて、私は秘かに尊敬していました。本当にすごい奴という感じです。

実はこの文章の中で、一番の想い出を書こうと思っていたのですが、一つに絞れませんでした。というより、思い出というと普通、卒業旅行などになるのでしょうが、飯田君の場合、そういったイベント事ではなく、普段の生活そのものが思い出となっているのです。数学の授業や H.R、休み時間の話・・・一つ一つが、二年間のすべてが、私にとっては大切な思い出となっています。

二年間、常に私たちに対して飯田君は笑顔を見せてくれていました。あのはにかんだ笑顔によって、何度も元気付けられました。これからも、飯田君の笑顔を、私の元気の源にしたいと思っています。

本当にありがとう。

八木 真晃 (成蹊大学)

関東の梅雨明けを翌日に控えた月曜日、始めて北鎌倉の駅を降りた。早くから暑さの厳しい今年だが、月曜日の鎌倉は比較的人も少なく、お盆らしいのだが墓地にはほかに人影もなかった。

彼と知りあったのは最後のクラス替えの時で、高校二年の春だった。最初から最後まで無口で、こちらから話しかけなければ黙っているような人なので、同じクラスでもなければ知り合いにもなれなかっただろう。クラスの中でもほとんど話したことのない人もいると思う。まじめでシャイで、自分のことより人のことに気を使うような人で大阪に行って

からも、帰る度にまめに電話をくれるような人だった。
去年の秋には、十月の末に友達と集まる用事があったことと、うちの学園祭の間に大阪を訪ねるつもりだったこととで、彼に何度か電話をした。最後の時にこれから合宿だと聞いていたので、休み明けの四日に電話をする約束をして別れた。

自分もそうあれたらいいが、多くの知り合いの中、友達には恵まれていると思う。その中でも彼と知りあえて、本当に良かった。

人は目の前に何が待っているのか知らない。だから周りに合わせた生き方をしてはならないと思う。
自分らしく生きること。

佐々木　努 (元 成蹊高校 3A クラスメイト)

僕が彼(飯田君)と話を初めてしたのは、おそらく近藤を介してではないだろうか。彼は高2 からうちの高校に編入してきた。よって、誰も知り合いがおらず、始めの頃はいつも一人ぼっちだった。彼は決して外向的な性格とはいえず、自分から人に話しかけるのは苦手なタイプだった。僕も、人付き合いが上手な方だとは決して言い難く、お互いに話しかけあう可能性はなかったと思う。前述の近藤君は、人に話しかけるのが好きで、彼がおそらく最初に飯田君と仲良くなったのではないかと思う。僕も、彼等と共に理系で、一緒に行動することになり、飯田君と初めて話す時がやってきたのだと思う。

僕は、やや人のはなしを聞きづらく思うことがあり(聞こえないのではなく、聞き取れないのである)、飯田君は決して聞き取りやすい話し方をしなかったので、よく何度も同じことを聞き返したものだ。それでも、いつの間にか仲良くなっていた。

彼は、非常に人当たりが良く、優しかった。また、照れ屋でもあった。よって、クラスのみんなが彼に好意を持っていた。彼が、学年の実力テストで 4 番を取った時などは、クラス中で彼を祝福していた。彼は、決して良い体格をしていたわけではないが、運動神経は良かった。球技大会などでも活躍し、みんなが騒ぐと、照れ笑いを浮かべていた。彼はまた、人が面倒を見てあげたくなるような性格をしていたので、何かあると皆が自然と彼を助けに集まっていた。うちの高校には「桃李物言わざれども下自ら蹊を成す」という言葉がある。(人柄のよい人の元には、何もしなくてもその人の人柄をしたって自然と人が集まってくる)という意味である。彼を見ていると、何となくこういうことを言うのかなあと思われたものだ。

高校卒業の時、彼やそのほかのクラスの人達、先生とともに春スキーに行った。彼はやはりスキーもうまかった。それ以上に彼の優しさが記憶に残っている。ある女の子がスキーが上手でなく、みんなで行動しようにもなかなか手間取っていた。彼女の面倒を彼は辛抱強く見てくれたのだ。

彼は残念ながら、浪人した。おそらく、彼の性格によるところが大きかったと思う。彼はあまり本番で実力を発揮するには性格が優しすぎたと思う。彼の浪人時代に何度か彼に会った。彼は代ゼミに行っているということだったので、友達ができにくくて大変だろうなああと思った。あそこは席が指定でないから、彼のように自分から話しかけない人にはあまり向いていないのではないかと思ったからだ。

ある日、彼から電話がかかってきた。「世界陸上のチケットが手に入ったんだけど、うちは誰も行く人がいないから、どう」ということだった。僕は、大学に入って陸上部に所属していたので、願ってもない話であった。彼の地方に住んでいる親戚に券が当たり、東京に住んでいる彼のところに送ってきたのだ。彼は、僕が陸上を大学でやっていることを知っていたので、連絡してくれたのだ。そのおかげで、パウエルの幅跳びの世界新記録を目の前「テレビカメラよりも前で」見ることができたし、ルイスの 100 の世界新の時も国立競技場で見ることができた。こんなに彼に良くしてもらいながら、僕は彼のためにたいしたことは何もしてやれなかった。したことといえば、大学に受かるにはどうしたら良いかなどを偉そうに述べていたにすぎない。

彼は、本当は京大の理学部を志望していた。しかし、2 回目も彼の性格が災いしたのだと思う。阪大の理学部に行くことになった。

大阪に発つ前日、高校の友達と、先生と一緒に吉祥寺で食事をしたような気がする。その後、一緒に徹マンを近藤の家でしたのである。これが僕にとって今のところ最初で最後の徹マンである。

その年、七大戦は大阪大学の主管であった。僕は陸上競技の方で、大阪に行くことになった。試合の後、阪大のどこかのキャンパスでのレセプションを抜け出し、彼の下宿に泊めてもらった。彼は、昼間応援で(競技ではなく)汗だくになった僕を銭湯に連れて行ってくれた。その後、彼の下宿に連れて行ってもらい、大阪の夏の夜のもと、彼と長いこと雑談にふけった。そのまま、彼の部屋にざこ寝させてもらった。彼にとっては窮屈だったに違いない。翌日、七大 T シャツを買いたいという僕を、彼は阪大のキャンパスに連れて行ってくれた。ついでに部室も見せて頂いた。その後、炎天下の中、大阪城に連れて行ってもらった。彼曰く、「大阪に来てから全然遊びに行っていない」ということで、その日は久々にどっか行ったということだった。本来ならば、彼にこれだけ世話になったのだから、何かしてあげたかったのだが、その時僕には持ち合わせのお金がなく、東京に帰るので精一杯だったので、逆に彼におごって頂いた。今思えば、もうちょっと事前に準備しておけば少なからずお礼ができたのに、と悔やまれてならない。

その後、彼が東京に帰ってきた時に、1 回ボウリングとビリヤードをして遊んだ気がする。もしかしたら、これは彼が大阪に行く前だったかもしれない。僕は体育会の陸上の方が忙しく、彼が何度か東京に戻ってきた時、いつも彼から電話をいただいたが、残念ながらなかなか彼に会うことができず、電話で話すのみだった。

高校の連中で成人式のパーティーがあるという時、彼は試験だか何かで来られないと言っ

たが、僕は何とか来るように言った。この時、何としても来てもらって会っておきたかったと、今にしてみればそのように思われる。

11 月 3 日。僕は練習がなく、久々の休日だった。高校の時の別の友達に半月近く前に大学のキャンパスで久々に会い、この日は夜に、「ジュラシック・パーク」を見に行くことになっていた。夕方、新宿の地下街でカレーを食べていたところ、その店のラジオで不吉なニュースを聞いた。彼のことだった。別に僕はニュースに熱心に耳を傾けてはいなかったし、名前のところがはっきりとは聞き取れなかったので、聞き間違いであることを願った。一応家に電話して、6 時のニュースでそれらしきことをやらないかチェックしておくように頼んだ。映画の予告編で、クリフハンガーの予告編が映し出された。スタローンが絶壁から落ちるシーンが映し出された。非常に嫌な気分であった。どうしても彼のことがダブってしまう。

家に帰ると、そのようなことはニュースではやらなかったということがわかり、ほっとした。その日の夕刊も、翌日の朝刊にもそんなことは書いていなかった。(うちは朝日を取っている)しかし 11 月 4 日、家に帰り彼の訃報を聞いた。ショックだった。僕の祖父が中 2 の冬に亡くなって以来の身近な人の死であった。告別式の時も、最後に花を添える時に彼の顔を見るまでは信じられなかった。信じたくなかった。でも、医学部に通い、人体解剖も経験していた僕にとっても、花を添えた時はショックであったが、周りのほうがずっと呆然としていた。死に対する感受性が鈍くなっている自分が嫌だった。

僕は、彼が将来どんな人になるかを楽しみにしていた。大学を卒業した後も会うことができるのを楽しみにしていた。僕は、それまでに彼に受けた恩に値するだけのことを彼にしてあげられなかったので、大学卒業後も末永くつきあって何かの役に立てたらと思っていた。でも、もはや彼に何もしてあげられない。後悔先に立たずである。日常生活の忙しさにかまけて、彼の相手をすることを怠ったからだ。彼はこんな僕を非常に慕ってくれた。でも僕は、彼の気持ちに答えることができなかった。僕は、いつでも彼に会えると思っていたのだ。彼もそうだと思う。こういうことがあると、「やはり人生その時が楽しければよいのだ。先のことを考えて苦労しても仕方がない。」ということになってしまうのだろうか。僕は「将来の楽しみのためには、今の楽しみを犠牲にするのは仕方がない。日々の楽しみを少しずつ貯金することによって、より大きな、貯金の総額よりも大きな喜びが将来得られるのだ。」という考えである。でも、人は死んでしまったら終わりだ。彼だって、決して自分の人生に満足しているはずはない。僕だって今死んだら、何のために生きてきたのかわからない。彼は、失いつつある意識のもとで何を考えたのだろうか。

僕は登山が嫌いだった。何が楽しいのかわからなかった。でも大学に入り、合宿の際に練習の一環として山を登らされるようになり、少しは考えが変わった。相変わらず僕は山登りは好きではない。でも、僕のやっている長距離走と同じような魅力があるのではないかと思われる。長距離走は、走っている時は、特に後半は非常に苦しい。練習も苦しいものが多く、娯楽性はあまりない競技だ。でも、レースを良い記録で走り終えた時の爽快感、

充実感は何物にも代え難い。苦労した分だけの喜びがある。いや、それ以上の喜びがある。彼にとって登山もきっとそうであったのだろう。ただ、彼の負っているリスクの方が大きかったのだ。

今後このようなことが二度と起こらないように阪大の人達に願う。でも、もはや手遅れのような気がする。

僕は、将来の大きな楽しみの一つを奪われてしまった。

僕は、大きな悔いを残すことになった。

最後に、彼が何らかの形で報われることを願う。

篠原 一衣 (元 成蹊高校 3A クラスメイト)

飯田君と最後に話したのは去年の十月二十八日、もう何ヶ月ぶりかの電話ででした。

そこで近くの山に登ると聞きました。それもかなり険しく、たくさんの慰霊碑？が登山口に積まれ、多くの遭難者を出している山なのだ、とも聞きました。じゃあ気をつけないとね、と話していました。

他に、登山の様子についても話してくれました。

雨が降ると大変であること、とにかく汚いこと、食生活もなかなかひどいものであること、女の子であったら恐らく耐えられないだろうから、もし入部してもすぐにやめてしまうだろうということなど。どれもできれば遠慮したいことばかり言っていました。ので何故山に登るのか聞くと、「うーん、何でだろうね。」と答え、その魅力を問うと、「友人との絆が深まることかな。」と。そして「星がきれいだよ。」と言っていました。

いつもですと大阪、東京間の電話なので料金が気にかかり早々に切り上げてしまうのですが、その時は、コードレス電話の充電池がなくなるまで話しました。

そして一週間後の十一月四日、私は飯田君の訃報を受けました。

この日外から帰ると一枚のメモがあり、そこに通夜と告別式の日時が記されていました。

一体誰が亡くなったのかと思い、見ると「飯田」と書いてありました。しかし、おかしなことに私は最初この二文字が読めず、思わず父に、何と読むのか尋ねたことを覚えています。

今にして、あの日の電話は、虫の報せであったとも考えています。

そしてそこで、よく話すことができたのは、本当に良かったと思っています。

川上　和幸 (大阪大学体育会山岳部当時四年)

私が最初に飯田君の事故のことを知ったのは、自分の山行を終えて、下宿に帰って来た時でした。その時は下宿の管理人さんに教えて頂いたのですが、知らされた瞬間、周囲の音がしばらくの間消えたようになり、呆然としてしまったのを今でもよく覚えています。全く信じられませんでした。本当に。次の日、彼の通夜の為に東京へ向かっているときも、

まだ、信じられませんでした。東京に着き彼の顔を見て初めて、現実感と同時に、何とも言えない気持ちが込み上げてきました。

大学にいる時の彼とは、週一度の岩トレの後、一緒に飲み食いすることがよくありました。彼はどちらかといえば、口数の少ない方でしたが、たまにぼそっとギャグをとばしたりするそんなやつでした。また彼は珍しいくらいにやさしい奴でした。困っている友達がいると、山でも、普段の生活でも進んで協力してくれたのをよく覚えています。そんな山岳部にはとってはならない彼を亡くしてしまったことは残念でなりません。

その後一年を経過しましたが、幸い事故なく合宿を行うことができました。彼の事故の上にたった反省がこれに結び付いたのかどうかはわかりませんが、部員が以前と比べて、山に対して謙虚な気持ちを持つようになったのは確かなことだと思います。僕はもう四年生で卒業してしまいますが、残る部員のみんなには、そのような気持ちを常にもって山行に臨んで欲しいと思います。そしてこのような事故は二度と繰り返さないで欲しい。大切なのはこれからだと思います。夏山合宿の様子を聞く限りでは、二年生、三年生がだいぶ上級生らしくなってきているようです。技術の伝達はもちろんですが、それだけでなく今年入部してくれた一年生や、この後も入部してくるであろう一年生諸氏に対して、この事故から学んだことを伝えていってほしいと思います。そして事故を起こさないこと、このことを飯田君が一番望んでいるのではないでしょうか。

「飯田君への追悼文」　　**光永正樹** (四年)

飯田が事故にあったとき、私はちょうど偵察山行（飯田とは別のパーティーでした）から戻ったところでした。JR 松本駅で第一報をうけ、飯田が死んだなんてちょっと信じられなかったのですが、その足で上市に向かいました。上市の警察署につくと、変わり果てた飯田が安置されていました。山で仲間が死んだという生々しい現実の前で、不思議と涙は出ませんでした。翌日装備や遺品の回収のために現場に向かっている途中で、俺は飯田が事故をした現場に向かっているんだな、と思うと今度は不思議と涙が出てきました。

飯田が事故をした所は東に武蔵谷、西に東大谷があり、雰囲気は暗いものとなっています。山で命を落とすにしては寂しい場所だなと思いました。飯田もこんな所で命を落とすのは絶対イヤだったでしょう。きっと最後まで、家に帰りたいと思ったにちがいありません。すまんかったな、飯田。

この事故は多くの人にショックを与えました。とくに御両親の飯田を失った喪失感を考えると、本当に申し訳ない気持ちになります。なんで息子がそんな危険な山なんかに登ったのか…とくやしい気持ちになったと思います。

私が山を登り始めたキッカケは、山岳部の先輩と下宿が一緒だったというささいなことでした。それからだんだんと山が好きになっていきました。いま私が山に登るのは、山を

登っている時に一番充実感を味わえるからです。しかし充実感を堪能しつくした領域にはまだ達していません。今度こそ堪能しつくせるのではないか、と考えながらいままで登ってきたつもりですし、これからもそのつもりです。しかし飯田は、山は危険ですよ、と身をもって教えてくれました。この教えを頭に焼き付けて山を登らなければ飯田に申し訳が立たないし、私が山岳部の先輩として飯田にしてやれることといえばこの位しかありません。その上で飯田に、今度こんなおもしろい山に行ったぞと報告すれば、飯田への供養になるかもしれません。

飯田は酒の席でもあまりしゃべらず、ニコニコしているような気の良い後輩で、頼まれればイヤという性格でないためか、あまり酒が飲めるわけでもないのによく飲み屋に連れて行ったものでした。飯田は結構いやがっていたかもしれませんが、今にして思えば、もっと連れて行けば良かったなと残念でなりません。飯田は本当に突然いなくなってしまったので、飯田といっしょにやること（山登りや酒を飲みながら話をすること）が残ったままです。残念です。そのかわり、今度からできるだけ他の奴等と、飯田といっしょにできなかった分まで山に登ったり、酒を飲んだりするつもりです。

今度のことで、人と人のつき合いというのは、できるときにできるだけやっとかないといけないな、と教えられました。この教えをこれから大事にして行きたいと考えています。

寺田 浩昭 (四年)

あの夜からもう一年が経とうとしている。飯田君遭難の報を聞いたとき、まさか本当のこととは思えず、この最悪な内容だけは誤報であるかもしれない、そうあってくれと念じつつ一晩まんじりともできなかった。後で聞くと、この時既に森藤さんと光永は現地に向かっていたと聞く。この点に関しては動転するばかりであった自分の迂遠さが悔やまれてならない。そして翌朝いよいよ彼の亡くなったことが揺るぎない事実であると知れたときの心境は今となっても到底忘れることはできないものだった。その日ほど部室へと向かう道のりが遠く感じられたこともまたついぞ無かったことだった。

彼と知り合ってからの期間は一年半に過ぎず、決して長いつき合いと言えるものでは無かったと思える。彼ははにかみ屋といったふうで誰にでも気安く声を掛けるといったことは無かった様だったし、私自身もそういう所があったので、勢い深く語り合う機会も少なかったと思う。とはいえ、彼に会うことはもうできないと考えるときに感じる寂しさはいささかなりとも減ずることは無い。彼は余り喋らずに何時もにこにこしていたし、様々な機会において優しい性格であったろう面を多く見せていた。そういう逸話を今でも部員たちから聞くことができる。飯田君は他の人が余りやりたがらない作業を進んで行うその点では一緒に山に向かうには申し分のない人だった。

彼は自分から目立とうとしているのは私の知る限りでは一度も無く、逆に冗談として彼は

気が付くと居なくなっていると言われていたものだった。山の中でもしばしば同様だった。だがしかし私にはそれが彼の山に対する深い自信と見えて敢えて何を言うことも無かった。事実あの直前まで彼には何の事故もなかったのだ。
飯田君の油断をついて事故が生じたのだと考えるとき、もし私を含む上級生の立場にあるものがどの様な些細なことに際しても煩く口を出していたならば、彼ならその様なことからでもあの事故を防ぐべく注意を喚起しえたのではないかと考えると残念でならなくなる。我々だけは事故と無縁でいられると考えるいい加減さが有ったことが残念でならない。何処ででも誰にでも遭難は起こり得るということだけを知るのと引き換えにするには余りに大きな犠牲であった。我々が二度と事故を起こさないと誓うことが必要である。この事は飯田君にぜひ見守っていてほしい。

藤田 哲史 (四年)

飯田君が死んで五か月がたった。もう五か月もたったかという気持ちだ。飯田君が死んだといっても、僕が最後に見たときは、まだ生きていたし、上市の警察署で遺体と会ったときも、全然飯田君らしくなく、なかなか飯田君の死をわかることができなかった。もう、飯田君とは、会えないということが理解しにくかった。ただ、雷鳥沢で電話で「飯田君が死んだ。」という話を、救助ヘリから連絡があったと警察の人から聞いたとき、「ああ、死んでしまった。」と思った。雷鳥沢にいるときは、まだヘリが来れば、大丈夫だという思いにすがりついていたのかもしれない。
飯田君の事故以前は、やはり、「山は危険だ。」と両親や友人から言われたりすることがあったが、用心して行動していれば、絶対大丈夫だと考えていたように思う。これはある意味今でもそう思っているが、ただ、不注意や突然のアクシデントによって死んでしまうということは、余り深く考えていなかったように思う。つまり、山に行くことは、ある程度の危険を必ず持つのだということがはっきりわかっていなかったのだろう。飯田君の死によって、そのような危険を冒しても行くならば、価値ある山行にしなければいけないし、そうでないなら、危険度の低い山に行くべきだと考えるようになった。
今回の事故によりいろいろな問題点や改良点があらためて浮き彫りにされたと思うが、このことがそれだけで終わることがなく、これからいかされるようになるように努力し続けていかなければいけないと思う。また、飯田君のこれから続いたであろう人生を考え、また、両親や親類、友人などの悲しみを考え、山では、絶対に死んではならないし、死なせてはいけないということを肝に銘じて、行動するようにしたい。

前田　智 (四年)

天気は快晴、少し急な程度の雪面。一体誰がこのような事故を予期しえたであろうか。

事故は忘れたころにやってくる、とはよく言われるが何もこんなときに起こらなくてもよいものを。飯田君と仙人温泉に遠足に行った時のことがまるで昨日のことのように思い出される。改めて仲間を失うことのつらさが痛感される。
だが悲しがってばかりでは彼の死が無駄になるという総意が我々にはあった。どうすれば事故は防げるか、練習はどうあるべきかなどが飯田君の同期の部員を中心として話し合われ、実行に移されてきた。天国の飯田君も満足してくれると思う。
私は入部以来他の部員に頼りっぱなしで、飯田君にもたのしい時間をいっしょに過ごさせてもらった。このことを心から感謝し、飯田君のためにもこれからも登山をつづけていきたいと思っている。

青木 成一郎 (三年)

飯田君とともに山行へ行ったのは主に個人山行と二年生の夏山縦走でした。自分が飯田君を良く知るようになったのは一年生のときの個人山行に誘ってからだったと思います。それまではとにかく忍耐強く、夏山縦走でも足にまめができて、それがつぶれてひどい具合になっても何もいわなかったというような話を聞いていたぐらいで特に親しかったわけではありませんでした。その年の個人山行は、はじめは中央アルプスへいく予定だったのが、南アルプスの東部へ行くことになりました。でも飯田君にとっては初めてのやぶ山で、また南アルプスの主稜が良く見え、思ったより喜んでくれたのが印象に残っています。自分でも結構よかったと思います。そしてその時に初めて飯田君はバテを経験したといっていました。また、後に中央アルプスにも行きたかったとぽつりといっていたように思います。この山行は自分にとって非常に印象に残っています。

その次に二人で計画して山行へ行ったのは二年生の時の夏山定着合宿前の個人山行でした。今度は南アルプス深南部へ行ってみようということで二人で早くから計画していたことでした。しかし生憎、天気が悪くて結果的には失敗に終わってしまったのでしたが、それなりに楽しめたのではないかと思っています。その次の縦走も今年はハードに行こうということで飯田君と計画を立てたのですが、やっぱり天気が悪く、最後までは行けなく残念でした。もっとも、充実していたよう思いますが。この二つの山行はいやになるほど天気が悪かったと思います。この年の三度目の山行は白山でした。やっと天気が良い山行に巡り会えて、なかなかよい山行となりました。これは、はじめは都合がつかず、行かない予定だったのが行けるようになり、飯田君の山行に入れてもらうことになり、三人で行くことになったものでした。飯田君が一人で計画した山行で、このときは何かいつもよりもずっと張り切っていた様に見えました。下山では自分が遅れをとることになりました。この山行が結局、いっしょに行った最後の山行となってしまいました。早月尾根の偵察の前に会ったときには、ろくろく話しもできなかったのが、また二度と話ができなくなってしまったのが非常に残念です。

飯田君は電車が好きだったかどうかはよく覚えていないのですが、電車の時刻を良く知っていて、電車の乗り換えなどで本当に非常に頼りになりました。

できれば二年のときの個人山行、縦走がともに天気が悪く、失敗に終わってしまったので、次の年にもう一度行きたかった。気に入った山が自分と結構合っていたのでいなくなってしまって非常に残念です。飯田君はあまりものを言わない性格だったので腹を割って話すような時が持てませんでした。もっといろいろ話をしたかったです。

「飯田君の思い出」　**尾崎 夏樹** (三年)

僕が飯田君と出会ったのは、一回生の五月の頃で、ちょうど最初の岩トレの日でした。飯田君は見るからにやさしそうであったし、又、少し話をしてみても温和な印象を受けすぐにその人柄にひかれて親密になりました。一緒にいるときの飯田君はもの静かで、人の意見はよく聞くが自分の主張はあまりせず、行動するときもたいてい誰かの後ろにおり、ぐずぐずしているうちに彼のマットがとられたり、テントラッセルをやらされたりと、損な役回りも多かったように思います。

しかし、彼が最初に行いありきの人であることは一年も供に山行をしていれば、すぐにわかりました。いくつもの山行をこなしてきましたが、偵察山行の時は、始めてのヤブこぎでしかもデポ缶の入ったザックは重たく、そのあまりのしんどさにただ前の人の背中を見失わないようについて行くことしかできず、休憩のたびに泣き言をこぼす僕に、飯田君は笑ってうなずいてくれてましたが、その実疲れているようにはとても見えませんでした。その山行の最後の日、川の渡渉点が見つからず、探しにいく先輩方をよそめにさっさと休憩を決めこむ僕でしたが、飯田君はいきなりビニール袋を足にまとうと、ジャブジャブと川を渡って行き、道を切り開きました。またある時はいきなり山スキーをやるぞと言い出し、山スキーのなんたるかさえわからない僕はただうなずいてなりゆきを見守っているだけでしたが、二月にはすっかり装備を整えて、スキー場に僕たちと供にいき練習を繰り返していました。

あの雨にたたられた夏の定着のときにもそうでした。夕暮れを過ぎても帰幕しない藤田さん達のパーティーを気づかって、真っ暗になった長次郎雪渓を飯田君にひっぱられるように二人して登ったものです。アイゼンもなしに登るので危ないから翌朝明るくなってからにしよう、という僕の主張が彼を引き止めたのは、もう出合いからずいぶん来て傾斜もかなり急で、そこからこわごわ引き返したものです。彼がそんなに心配していたのかということに、その時ようやく気づきました。結局パーティーはその後無事に帰還しました。皆がテントから出てきて無事を喜んだり軽率さをたしなめたりワイワイやっているその後ろで、彼は一人真っ先にエッセンに紅茶を沸かしに行ってるのを見たものです。

結局、口数で少ない分、誰よりも先に動き、誰よりも皆のことを気づかっていたのかもしれません。それに気づかず彼を見くびっていたこともあったかもしれない。しかし彼は

もはや動こうとはせず、大きな虚無感と悲しみだけ残して、彼は逝ってしまった。
飯田君の残していった山スキーをもとにして、今年ようやくスキー山行を行うことができました。彼がいてくれたなら一年早く実現できたろう。会ってそんな話がしてやりたい。

川口 泰宏 (三年)

初めて会ったのがいつだったかは覚えていない。しかし、飯田という人間を意識したのは夏山入山の日だった。僕を含めた数人は他のメンバーより遅れて入山した。その時川上から、「飯田って怖いわ。しんどいとも言わずにぶっ倒れるんや。びっくりして、大丈夫か聞いたら、大丈夫です、とか言いながら額から血がでとるんやで。あれはびっくりしたわ。」と聞き、「すごいやつだな。」と思ったのを覚えている。

その年のある秋の日に、一緒にサッカーをした時のことだった。あのまん丸っこい体からの予想もしていなかった運動量に、尾崎と一緒に驚いたものだ。冬山の時に、皆で交代でラッセルをするのだが、飯田の歩幅の大きさに、すぐ後ろの光永が悲鳴を上げていたのが印象深い。あと、いつだったかは忘れたが、飯田の部屋に尾崎と一緒に遊びにいった時、部屋の散らかり具合に閉口したこともあった。(下宿生ならあんなものかもしれないが。)特に 2 回生になってからは、皆で中西の部屋に遊びに行く事が多くなり、横のつながりも大分できてきた。(この頃の事が一番思い出に残っている。)

11 月 3 日、偵察山行における僕たちの隊は何事もなく終了し、喜んで帰ってきた。確か午前八時半ごろ学校に着いたはずだ。ちょうど学園祭の最終日で、いろいろ見て回ったような気がする。夜帰ってきて早めに寝ていると、電話があり・・・。気が動転して何もできなかった。正直なところ、「もし事故に遭うならば、体力・技術のもっとも低い自分が最初に遭うだろう。」と思っていた。

僕にできる事は、ただこうやって覚えている事だけである。でも、ずっと覚えていようと思う。もし僕が逆の立場だったらそうしてほしいから。

中西 英夫 (三年)

飯田君の、結果的には最後となった山行出発の二日前の深夜、彼と僕は、彼の部屋の TV の前にいた。画面上ではサッカー日本代表が、初の W 杯出場を賭けてイラクと死闘を演じていた…。

思えば無骨な奴だった。如才なくつき合えるまで約一年もかかった。偶然彼とは山行を共にすることが多く、何気なく言葉を交わしあっているうちに下宿が近いことも知った。しかし、根本的に人づき合いは苦手だったようだ。「学部内にはあまり友達はおらず、実験を行うときは困るんです。」と苦笑いをしていた顔が、今でも脳裏に浮かぶ。

思えば強引な奴だった。共に山に入っても豊富な体力にモノを言わせてばく進する。パー

ティーという枠や、他隊員とのしがらみを越え、一人ではるかかなたを歩いていく彼を、疲労で薄らいでいく視界にとらえた僕は、こいつこそ真のアルピニストだという思いを一層強くしたものだ。一方で、深夜十時に、僕の下宿に乗り込んできて、やれコミックの続きを貸せ、やれゲームをさせてくれとはにかみながらも、拒否を許さない目で訴えられた時は、仕方がないと半分あきらめ気分でお付き合いさせてもらった。こんな強引な彼、しかしエゴではない、だから皆から「それもあいつのキャラクターのひとつ」愛される所以であったのだろう。

思えば熱しやすい奴だった。彼は高校でバスケ、僕はサッカーを信奉していたこともあり、よく「真の球技論とは」という題のもと、論を戦わせた。結果は、J リーグの追い風も受け、僕が彼を論破し、いつしか彼も熱烈なサポーターの一人となっていた。一度自分をサポーターと認めると、彼は僕との知識差を埋めるために、本を読みあさり、ビデオで一日最高七試合をチェックしたと嬉しそうに話していた。山行後の銭湯内で、明日の日本代表構想を二人で練り合わせたのは、いつの日だったか…。

日本代表はロスタイム中のイラクのゴールにより、W 杯出場の夢を断たれた。常日頃から「日本が W 杯に出場なんかできる訳ない。サッカーを十五年見続けてきた俺が断言する」と公言していた手前、TV 画面前で、ほっと胸を撫で下ろしていた非国民（？）な僕に、「さすがだなあ、中西さんの言った通りでしたねえ。」と飯田の痛いような尊敬の視線にさらされて、表面上は、当たり前だろうと虚勢を張って、心の中で安堵していたあの日は、飯田の最後の山行への出発二日前。深夜三時頃、僕の家から送り出した時が彼との最後の会話を交わした時となってしまった。

彼を亡くして改めて思うことは、彼が生前僕に与えてくれたもの以上のものを僕が彼に与えることができたかということだ。深く考えると、確かに納得できない部分もある。しかし、そこは無理にでも納得しなければならないのだと思った。彼には僕からはもう、何も貢献させてはもらえないのだから。

ありがとう、飯田。

磯部　寛（二年）

白馬大池での新歓合宿と剣真砂での夏山合宿。飯田さんと行動を共にした山行はたった 2 回だけでした。しかし、十分とはいえなくても、その 2 回の山行で飯田さんの柔軟な人間性を知ることができました。

私が山岳部に入部したのが 4 月 21 日で新歓合宿は 29 日からだから、そのころは、まだ先輩の名前も顔もはっきりと覚えていない状態でした。そのなかで飯田さんは最も印象に残った一人となったのです。そのころの私は入部前にほとんど運動をしてなかったせいか、かなりの体力不足でした。体重は今よりなんと 12 キロも重かったし、約 3 キロの山岳部の

トレーニングコースも完走できないくらいだったのです。当然のように途中でバテはじめ、汗が滝のように流れ出したのです。とうとう苦しみに耐えることができなくなり、足を止め、目指す頂を見上げると、同時に飯田さんの姿が飛び込んでくるのです。一人だけ列から離れ、スキー板をつけて歩いていたからです。その体力にどんなに驚き、感心したことか。そして、スキーをする姿がいかに私を奮い立たしめたことだろう。それに対して、帰りの電車でみんなが寝静まったころ、キスリングの山を越えてトイレに行くのを見て、先輩から聞かされた、おもしろいが迷惑な性質――夜になると、必ず、用を足すためにテントを抜けだすこと(たとえ外が吹雪でも)――を思い出して笑いをこらえたものです。しかし、本当に残念なことに、山の中でその行動を見ることができませんでした。飯田さんと同じテントに入ることは始めから終わりまで一度もなかったからです。

夏山合宿では、スキー板が登山靴にかわっても相変わらず雪の上を滑っていましたが、それ以外にも、歩く速さに驚かされました。どんなに石が転がっていても、どんなに木の根が張っていても、スピードを落とさず、まるで走っているように(本当に走っていたかもしれない)歩くのでした。なぜこんなに速く歩く必要があるのかと疑問に思いながらも、あの丸い体をスムーズに運ぶ歩行技術を盗もうと努力したものです。そして、靴の中に小石が入っても歩き続けたことも、下りになると絶えずブッシュをつかみながらだったことも見逃しませんでした。

今回の事故で、山の恐しさを十分に感じ、危険な山への躊躇があったことは否定できません。しかし、山では下界では得られない、この上もなく充実した、比べるもののないほどすぐれた喜びを得ることができると思います。そして、今ほど山登りを続けていこうという意志が固まったことはありません。今まで飯田さんと一緒に山を登ってきて、共に苦しみ、困難に打ち勝ち、このような喜びを大いに獲得できたのではないかと思います。そしてこれからも飯田さんのことは忘れないであろうし、いつまでも(心の中に残っている飯田さんと)一緒に山を登り続けることでしょう。もっとも、岩登りの場合には、以前私に言ったように、彼独特のアクセントでこう断られるかもしれない――岩登りよりも縦走の方がいいですよ。

「飯田君の思い出」　**給田 俊文** (二年)

飯田君とは初めの頃はあまり話をするということがなかったけれど、いつだったかちょっとしたきっかけで二人でくだらないことを話しはじめ、妙に気が合ったのを覚えています。それからふたりでちょくちょく話をするようになりました。たまに飯田君は僕のうちにきて、とりとめのない話をふたりでしゃべり合い、暇を費やしていたこともあった。その時から、僕は飯田君と自分との性格がかなり似通っているんじゃないかとぼんやりと考えていました。

飯田君と一緒だった山行に夏山縦走があります。南アルプスを夜叉神峠から鳳凰三山を

通り、甲斐駒、仙丈、塩見岳とまだ一年だった僕にとってはハードな縦走でしたがそのぶん思い出深い山行になりました。トップの飯田君になんとかついていこうと必死で足を進めていたのを思い出します。一人キスリングでどんどん先に進んでいく飯田君のタフさに改めておどろきました。この縦走は残念ながら計画半ばで断念ということになりましたが、またいっしょのメンバーで残りの行程を達成できたらと僕は思っていました。

飯田君の事故について何かを記すということはなかなか簡単なことではありません。どのようなものでもそれは不完全なものになり、自分の本当の気持ちをしっかり判断することも正直困難です。その事故は僕自身に起こったかもしれないしこれから起こるかもしれない。そのことを考えると正直いってとても怖く、不安になります。

しかし事故を(それがどの程度のものであれ)起こす可能性は誰のどのような行動の中にも潜んでいるはずです。それを当たり前のこととして受け取り、考え、対処していく、問題は僕がその事実を飯田君の事故以前にしっかり認識していたかどうかということです。それがきちんと頭に刻み込まれていたか、あいまいじゃなかったのか。

はっきりいって僕がそのような現実をきちんと考え行動していたとはとてもいえません。自分に限ってという考え方から僕はそんな現実を非現実的なものにすりかえていたからです。そのことに気付くのが遅過ぎました。

事故が起こるという可能性はゼロにはならないけれど部員一人一人でそのパーセンテージをさげていくしかない。それにはあらゆる場面で現実の状況と予想した状況のすき間を少しでも小さくしていく努力が大切だと思う。難しいことだけれど一人一人がやらなくてはいけないことです。

最後に、今年(94年)の夏、飯田君と一緒に行けなかった南アルプス縦走の残りの計画を達成できたことを記しておきます。

「追悼文」　**中村　聡** (二年)

僕が初めて飯田さんと会ったのは、多分最初の部会だったと思います。その時彼は部室の隅の方にいて、口数も多い方でなく、暗くてオタッキーな人かな、というのが初めの印象です。この推測は必ずしも外れていなかったと思うのですが。彼とは、学部学科が同じということで、そのことで話すこともありましたし、部会の時は何かしら話してたように思います。新歓、夏山も同じテントでした。彼は話し方に特徴があり、よって部員の中には彼の喋り方をまねるのがうまい者も数名いるのですが、そのあまり明るくない口調でおもしろいことをよく話してくれました。また、しんどいとか弱音を吐かず、またそういう態度も見せない、体力、忍耐力がある人でした。まあ弱音を吐かないのは、口数の少なさと関係があるかもしれませんが。彼と一緒に行った最後の山行は白山への個人山行でした。

彼が計画したものです。その山行中もいつもの飯田さんでした。帰りの交通費で金がほとんどなくなった僕には、ジュースを買うため足りなかった１円をニヤリとしながらおごってくれました。今でもあの飯田さんの話し方と笑い方は脳裏に残っていて、死んだという実感はしません。また人が死ぬというのはこういう感じなのかな、とも思います。

赤井 知司 (二年)

早いもので、あの事故から１年が経った。諸事情で故飯田君とは山行を共にすることがなく、今想い返すことのできる彼との思い出は残念ながら少ない。２・３度岩登りを練習したくらいだろうか。おとなしい性格の方だったので、そんなに言葉を交わすことも少なかったが、いつもニコニコしていて気持ちのいい奴だった。それでいて、ここぞという時には力を発揮してくれるといって、部員全員から好かれまた信頼されていた。そんな彼を亡くしてしまったことは、部員一同深く悲しむところである。故飯田君の冥福を部員一同祈りたい。